

吐き気と頭痛が止まらない。

オフィスに轟く上司の怒鳴り声が、連日寝不足の頭にひどく響いていた。わたしが怒られたわけではない。けれど毎日聞こえるあの怒鳴り声の中で、何度もリフレインしていた。

（はあ、こんな……真つ昼間の平日に休んでちや、ダメなのになあ……）

耐えきれず健康管理室に逃げ込む。

昨日は全く眠れなかった。産業医に許可を得て、カーテンで緩く仕切られただけのベッドの上でぐったりと横たわる。

気休めにと飲んだ睡眠サプリの効果だろうか。

少しボートとしていているうちに眠気が舞い込んできた。ごちやつく脳内回路がぷつぷつと途切れていく頃、ふと扉が開き、柔らかな声がした。

誰かが産業医と話しているようだ。

男性の声だけれど、あの怒鳴り声とは全く質が違う。落ち着いた、丁寧な喋り方だった。

——なんか、聞いてると、眠くなる声。

そう思った時にはもう瞼が落ちかけていた。

窓からふわりと風が舞い込んだのが心地良くて、カーテンが大きく靡くのも他人事に思える。

「はる、ちゃん……？」

何か聞こえたけれど、もう意識を保てない。

狭い視界にわずかに映ったのは品の良い、スリーピースのスーツだけだった。



ろこもこうさぎ

絢辻 透

「少し、お話を聞かせていただいてもよろしいでしょうか」

ぼんやりした頭に、柔らかな声が流れ込む。

目が覚めたのは管理室にすっかり西日が差し込んだ頃だった。頭痛が収まったのを確認して産業医にお礼を言い、廊下に出るとすぐに声をかけられた。

振り向いて見えたのは、少し青みがかったグレイのスリーピーススーツに、品の良いシルクのタイ。

うちの会社では見たこともない上品な出で立ちだ。顔を上げると――

――？ あれ、外国の人……？？）

絵画でも見ているようだった。

真珠のように淡く光を反射するプラチナブロンドが揺れている。

驚いた顔をしているわたしに、その人は眉尻を下げ、困ったように微笑んだ。

「ああ、すみません。驚かせてしまいましたね。僕、朝比奈 燈真(あさひなとうま)と申します。数日前から経営コンサルタントとして業務改善に携わらせていただいています」

「えっ、あつ、そうだったんですね……大変失礼いたしました、わたしは」
「速水はるかさん——ですね？」

思わず目を瞬かせる。

流れるように名前を呼ばれて啞然としていると、朝比奈さんは流水のようなアイスブルーの瞳を緩やかに細めた。

「不躰で申し訳ない、産業医の方に伺いまして。業務改善案を出す前に、社員の方に軽い面談をさせていただいて、あなたにもご協力いただけないかと」

「えっ、わたしにですか？」

「はい、……少し体調を崩されていたようですので、気になってしまつて。もちろんお体に障らない程度に、10分程度で構いませんから」

丁寧でゆったりとした喋り方が頭痛明けの頭に心地よく染み込んでいく。聞いているうちに少しボーッとしていたら、長い睫毛で縁取られた瞳がひとつ瞬いた。

自己紹介が足りないと思ったのだろう。朝比奈さんが鞆の中からコンサルティングについての資料を出し始めてしまったので、わたしは慌てて頷き、小会議室へと向かった。



——それからわたしは、どうしてこんなところに来ているのだろう。唾然として辺りを見回す。

目の前には、わたしの借りているマンションの一室が丸ごと入ってしまった。いそうな大きなリビングが広がっていた。

L字型の革張りのソファに、大理石のような質感のローテーブル。テーブルの上にはどこで売っているか何なのかもわからない、モダンで

美しい調度品が置かれている。

「ゆつくりくつろいでくださいね、はるかさん」
「は、はい……」

無理だ、と思いつつも返事をして開けた天井を見上げる。
吹き抜けの天井には、濃い木目のシーリングファンがゆつくりと回っていた。

ここは、とある有名不動産のモデルハウスだそうだ。

（ただ家で眠れない、って言ったただけなんだけど……??）

面談は結局、一時間近くにのぼった。

朝比奈さんは、まるで西洋の王子様のような見目麗しい見た目をしているが日本生まれで、おじいさんがイギリス人なんだそうだ。

毎度しなければならぬのである。その説明を終えた後は少し碎けた霧
困気になり、寝起きのわたしの拙い自己紹介にもよく笑ってくれ、すぐに緊

張が解れていった。

そうして部署の現状や小さな要望から始まったはずの話は、気付けば上司の怒鳴り声が苦手だということや、不眠で困っているというところまで行き着いていたのだが――

“そうなんです、怒鳴り声が……”

“あはは、わたしが気にしすぎなんですけどね、自分に言われてるわけじゃないです”

“そんなふうに言わないでください。聞こえてきたら怖いので、当たり前じゃないですか。なるほど、それで眠れなくなってしまった……と”

“あついえ、まあ、家の枕とかベッドが合っていないっていうだけかもしれないんですけど……!”

朝比奈さんが、まるで自分のことのように痛々しく表情を沈ませるものだから。

心配をかけてしまったと慌てて手を振ったら、少し屈むように身を近付けてられて。

「はるかさん……おうちでゆつくり眠れないんですか……？」

柔らかくも確かめるような声音で「それなら協力してほしい」と言われて。あれよあれよと、こんな豪邸のようなモデルハウスまで連れて来られてしまったのだ。

（ここって撮影とかで使うようなところじゃないの……？ 芸能人の豪邸みたいなんだけど……）

身の丈に合わない光景に立ち尽くしていると、朝比奈さんに様子を窺うように顔を覗き込まれた。

長い睫毛の奥からアイスブルーの瞳が煌めいて、なぜだか頭の片隅がちりりと疼く。

「突然のことで戸惑うとは思うんですけれど……業務の一環として、はるかさんにはしばらくここに住んでいただきたいんです」

「はっ？ 業務の一環？」

「はい。社員のメンタルサポートと、リモートワークの導入テストなども兼ねて。はるかさんにはここでリモートのお仕事をしていただきつつ、心身の回復に努めていただく。そういう『業務』です」

「そういう、業務……？」

「はい。ここは僕の管理している不動産のモデルハウスなので、お仕事以外は自由に過ごしていただければ」

「管理している、不動産……？？」

訳が分からずに一生オウム返しをしているわたしに、どこか気まずげに顎に指を滑らせた朝比奈さんが「朝比奈不動産って、ご存知ですかね。僕の実家、それで」と言ってきた。

普通の日本人なら誰もが知っている大手不動産会社の名前だ。全くついていけない。泡を噴いて倒れそうだ。

「なななっ、なんで、そんな人が、コンサル……っ」

「ふふ。僕、ドラ息子なもので。とにかくそういう訳で、ぜひのびのび過ご

していただければと……あ、食事も毎日宅配のサービスがあるので、作らなくても良いですよ」

——それは正直ありがたすぎる。

このところ睡眠不足が続いて自炊どころかまともな食事をできてなかった。お腹は空くのになにかを口に入れるのが面倒になっていたから、用意があるとしたら本当に助かるのだが。

……そうは言っても、こんな待遇を簡単に受け入れられるものではない。

「朝比奈さん……ありがたいご提案ですが、業務でしたら……その、わたしみたいな平社員より、他にもっと適任の人が」
「はるかさん」

ややしどろもどろになりながら顔を上げた瞬間、憂いを帯びた視線とかが合う。

宝石みたいな色をした瞳が不思議と少し乾いて見えて、逸らすこともできずに固まった。

「……目、充血しています。それにあなた、玄関でも少しふらついていました」

「あ……それは、」

「昨日、一睡もしていないんですよね？」

「で、でもさつき、寝ましたし」

「二時間ほどですよね」

心配性、なのだろうか。

物腰も丁寧で声音も柔らかいものだったけれど、どこか拒絶を許さない響きがあった。

思わずこくりと唾を飲み込み、小さな声で「……数日だけなら」と零すと、朝比奈さんは花が綻ぶような笑顔を見せた。

「水やお茶、コーヒーなんかはこの棚に……ああ、そうだ。睡眠サプリが効いたかもって、仰ってましたよね。もし良ければ、これを」

「なんですか、これ？」

「海外製の睡眠導入サプリです。実は僕も、お恥ずかしながら一時期不眠に

悩まされていて」

ダイニングテーブルに置かれたのは白いボトルに青いラベルが巻かれた、ひと目で海外のものとなるわかるデザインをしたものだった。

一拍置いて、机越しに差し出される。

「……だから、わかるんです、はるかさんが今どれほど辛いかな。僕にはよく効いたものなので、良ければ使ってみてください」

「朝比奈さん……」

噛みしめるような声と共に真剣な眼差しで見つめられる。

こんなに何もかも持っているような、完璧な人でも眠れなくなるんだな、なんて。

失礼ながらもどこか親近感を覚えて、ありがたく受け取った。

「食前に飲むものなので、よければもう飲んでおいてください」
「え、もうですか？」

「はい、せっかくなので夕食を手配しておいたんですが……宅配サービスとはいえ出来たで、すごく美味しいところなんです。届いたらきつと、飲むの忘れちゃいますよ」

ほんの少しいたずらっぽい、胸の奥をくすぐるような表情を向けられてドキツとする。

知らない場所でまだ不安はあるけれど、これで眠れるだろうか。

額いてラベルの表記通り三錠を手に取り、柵のペットボトルを手にとつてこくりと飲んだ。

飲んでいる間——恐らくただ待ってくれていたのだろうと思うが——朝比奈さんは何も言わずにじつとわたしを見つめていて、なんだかちよつと気恥ずかしかった。

それから夕飯が来るまでの間、あちこちの部屋の案内や説明をしてもらった。

「——このような設備なので、既にリモートワーク環境としては問題がないかと……ああそうだ、バスルームの案内がまだでしたね。お湯の出し方が

ちよつと独特なので説明します、どうぞ、こちらに」

「はい。……わあ、すごい」

リモートワーク設備の整った書斎の近くにあつたらしい、脱衣所とバスルームも見せてもらう。一人では持て余しそうな広いバスタブと、眩い銀色のオーバーヘッドシャワーと、透明のドア。

「お風呂場まで広いんですね……」

「ふふ、広いですよ。シャワーはここです。こっちがお湯で、ここを捻ると水になって……」

相変わらず現実離れた光景だ。

自分が数日でもここに住むとは思えずにボーっとしていると「はるかさん？」と声をかけられた。

「す、すみません。大きさにびっくりしちゃって」

「ゆっくり足を伸ばして浸ければ寝付きもよくなりますよ。お湯、下の栓か

「らも出ます、やってみて」

「あ、はい……っ」

朝比奈さんの声がどこか遠くから聞こえてくる。

わたしはぼんやりしたまま手を伸ばし、栓を捻ると――

「――ッ！」

「え、あ……っ！？」

しゃああ、と勢い良い音と共に、頭上の広く大きいシャワーから雨のような水が降り注いだ。

しかも、手前にいたわたしではなく、朝比奈さんにめがけて。

――うそでしょ。いくらボーツとしてたとしても、捻る栓、間違えちゃうなんて。

慌てて捻り直す。水は止まったけれど、朝比奈さんはすっかりびしょ濡れになってしまった。

「うわああ……！ うっうそ、ごごご、ごめんなさい……っ！—」

「はははっ、いえ、この栓が分かりにくいっていうのを身を持って教えられて良かったです」

「ほ、本当にすみません……っ」

濡れた髪をかき上げて笑顔を見せる朝比奈さん。格好いいけど見惚れている場合ではない。

品の良いワンポイントの刺繍が施されたシャツもベストも色が変わるほど濡れてしまっている。

——どうしよう、弁償とが必要だろうか。ていうか今どうするか考えないと。そうだ、着替えを用意しなきゃ、いやその前にタオルだ。

慌てきつたまま、そばに畳まれていたバスタオルをそつと被せた。

「と、とりあえずこれで拭いてもらってっ……わたし急いで着替え買ってくるので——ひやつ？」

「はるかさん」

覚束ない足取りでシャワールームを出ようとすると、慌てたように腰に手を回されてしまった。

パニックが止まらない。バランスを崩したわたしの身体を朝比奈さんの腕が支える。

小さな吐息すら感じてしまいそんな距離に朝比奈さんの顔が迫って、思わず息が止まった。

「あなたも、濡れてますから」
「え……っ」

囁くような、掠れたような。

どこか甘さの交じる声音に感じて、こんな時なのに全ての思考が止まる。動けなくなってしまうわたしに腕を回したまま、朝比奈さんはもう片方の腕でふわりとタオルを被せてくれた。

その時になってようやく、自分の髪と背中あたりが濡れていることに気付く。

「……僕、もう少しここにいても？ 乾燥機があるので、シャツだけ乾かせてもらえたら」

「あ……も、もちろん……、……っ」

乾燥機。乾燥機が、あるんだ。よかった。

そう思った瞬間だった。

ぐら、と視界がブレる。端正な顔立ちが二重に映って、そこから。

「はるかさん！？ はるかさん、……るちゃん、……っ!？」

がくんと身体力が抜けた。

意識が保てない。

何もかもぼやけ、白く塗りつぶされていくような頭の中で遠くに聞こえる朝比奈さんの声は、なぜだか懐かしい響きがあった。



ここは、どこだろう。

緩やかに意識が浮上して、視界が白く開ける。

白い。白い天井の、部屋だ。少し小さめのシーリングファンが回っている。確かさつき案内してもらったような。ベッドルーム、だっただろうか。

(……なんだろう、これ、まくら……？ あったかくて……きもち、いい……)

頬に当たる暖かな感触が不思議と気持ちよかった。
ぼんやりと目を開くと――

「はるかさん、起きました……？」
「ん、う……？」

まだ、夢の続きにいるようだった。

目の前にいたのは朝比奈さんだ。端正な顔立ちに心配の色を滲ませてわたしを見ている。

そんな彼の、細く長い指が確かめるようにわたしの頬に触れた。目元を撫でるように親指が滑る、その感触が心地よくて思考が蕩けたまま戻らない。無意識のまま、指のほうへ顔を寄せていた——その瞬間。

「ふ……かわいい、はるかさん」
「んえ……っん、……っ？♡」

ちゅ……♡ と、柔らかな唇が自分のそれに重なった。触れるだけの優しいキスだった。何度か繰り返されている。触れては離れて、もう一度。

——こんなことが現実のはずがない。わたし、こんな夢を見てしまっているのだろうか。恥ずかしいな。
そう思いながらうつと目を開けると——

「口、開いてみてください」
「……？ んう、ふあ……っ？♡」

囁くように甘いトーンと一緒に唇の下を人差し指で、く、と押されて。
開いた口の中に、熱い舌先が押し当てられた。

（あ……っ？♡ うう、唇の隙間なぞられるの、くすぐりたい……♡ 勝手に開いて……んん、舌絡ませられてる……♡ どうしよ、こんなキス、はじめてなのに……きもち、い……♡）

ちゅ、ちゅ、れろ……♡ と、ひどく湿った水音が頭に響いていく。それと一緒に、もう片手が脇腹のところへ直接触れた。その時になってようやく自覚する。

——わたし、服、着てない。
下着も、つけてない——？

「ふ……ぴく、つてしましたね。どうしたんですか、はるかさん」

「あえ……？ んん、やだ、はずかし……」

「駄目ですよ、まだ身体冷えてる。大丈夫、力抜いてください。恥ずかしいこと、ひとつもないですよ……？」

「あ……うあ、ん……っ♡」

——わたし、こんなこと、朝比奈さんに言ってもらいたいのだろうか、恥ずかしい。

けれどそんな思考もすぐに霧散する。脇腹を辿る手が胸の横あたりへと這ったからだだった。

撥ったさにシーツを蹴って上へと逃げたら、追いかけるように肩を抱かれて身体を抑えつけられてしまった。強くはないのに、逆らえない力加減で。そのまま——むにゅんっ♡ と、おっぱいの横から、膨らみをかき集められてしまった。

「ふあ……っ♡ ん、ん、なにぃ……っ」

「ん……♡ 敏感で、かわいい……ここ、気持ちいいですか？」

「ふう……っ？♡ うう……やだ、へん、あうっ♡」

「へんか、そっか、うん……♡ じゃあ僕が、教えてあげますね。ここ、気持ちよくなれるところなので……」

すり♡ すり♡ むにゅ……っ♡

胸の膨らみの付け根あたりだった。そんなところ擦っただけなはずなのに、柔らかくゆったりとした手つきで撫でられる度、ぞくぞくと下腹の奥のほうに疼きが溜まっていく。

（……っ♡♡ なにこれ、ほんとに夢？ うう、スリスリって撫でられるのくすぐったくて、ぞわぞわして♡ 勝手に……さきつぽ、うずうずしてくる……っ♡）

すりすり♡ ふにふに♡ と何度も触れられる度、隠すもののない胸の先つぽがツン……♡ と尖ってきてしまっていた。

こんなの恥ずかしいはずなのに、早く目が覚めればいいと思うのに。未だに意識は、綿雲の中をたゆたうように不確かだ。

「あ……はるかさんの乳首、触って触って……っで、してますね。えっちで可愛いな……」

「ふあ……っ♡ あっやだ……まわり、ばっかり……やああ……っ♡」

くるくる♡ スリスリスリ……♡

からかうように、細い指に乳輪のまわりをなぞられる。

まるで焦らされているかのような、どこにも性急さがないゆったりとした手つきに、身体が小刻みに震えていつてしまった。

「ああ、もう……もつとゆつくり触りたいのに。そんなにふるふる震えておねだりされちゃうと、甘やかしたくなっちゃうじゃないですか……♡」
「んっ、っ!?!♡ あ、ふあっ、んっ……♡♡」

かり……ッ♡ かりかり……♡♡

致死量の甘さの交じる声音と一緒に、薄い爪先で尖った先端を掠めるように弱く引つ搔かれる。

それだけなのに鼻にかかったような吐息が漏れて、慌てて抑えようと唇を噛んだ。

(あ♡ あ……♡ どうしよ、これ……きもちい……♡ ぴん、って勃っちゃった乳首、弱あくかりかりつてされてるだけなのに、うう♡ きもちい

いの、腰のところにたまってきて……♡ 太ももスリスリするの、やめられないよお……♡)

「はるかさん……そんな足すりすりしちやってたら、声抑えてても気持ち良くなってるの、バレバレですよ……?」

「ふあ……? や、やらあ、んう……っ!?!♡♡」

コリコリ♡ かりかり♡ ちゅ……っ♡

弱く引つ搔く爪先は止めてもらえないまま、角度の深い口付けが襲ってきた。

ぼやけた頭がバレバレ、という言葉を確認した時にはもう遅い。溢れ出る声は全て飲み込まれてしまっていた。

「ん……ね、はるかさん。今日はずっとキスしてましようか、そうしたら、声抑えなくてもいいですもんね……?」

「んう……っ? そんな、いき、できな……っふあ、!?!♡ うう、ん……♡♡」

まともな返事が何ひとつできないまま、またちゅううつ♡ と唇を合わされて、ぴったりとくっつけて擦り寄せていた太ももの隙間に足を差し入れられた。

そこでまた改めて自覚した。

朝比奈さんはストラックスを履いているけれど、わたしは……下にも何もつけていないのだった。

いくら夢だといえど、これは恥ずかしすぎるんじゃないだろうか——そう思ったのも束の間で、引き締まった腿で、ぐ……っ♡ と、おまんこを抑えつけられてしまった♡

「うあ……っ!?!♡ だっだめ、あし、っんむう……!♡♡」
「はるかさん、唇離さないで……えつちな声出ちやいますよ、いいんですか……?」

食むような口付けと一緒にぐにゅっ♡ ぐにゅんっ♡ と何度も圧迫されて目の前がちかちかする。

——そんなにしたら、朝比奈さんの服、また汚れちゃう。

そう思ったのに、ベッドと足に挟まれたそこからくちゅっ♡と、誤魔化しようもない水音が聞こえてしまって、一気に身体中の熱が高まった。

「くっつや、んんっ……あさひな、さん……あし、だめえ、ふうづっ♡」
「ダメ？ ……どうして？」

「ひん……っ♡ くっぬれ、ぬれちゃう、から、うああ……っ！？♡」
「ふ……ああ、ほんとだ、とろとろですね」

ぬちゅ……っ♡

確かめるように朝比奈さんのきれいな手が割れ目を這った。細く長い中指の腹がつう、と滑り良く伝っていつて——そしてすぐ、ぷっくり♡と顔を出しているクリトリスをごく軽く弾いてきた。

カリッ♡ カリ、カリ……ッ♡ と、ゆっくりと、何度も何度も繰り返される。

（あ♡ あ、あ……♡ やばい、これ……っ♡♡ じぶんですると、全然ちが……♡ いつくるか、わかんなくて、っあ♡ 余計期待して、ふうふう

息するのとまんない♡ カリカリされるの期待して、足開いちゃうの恥ずかしすぎるのに、だめ……ばかって、開いていっちゃうよお……♡)

「はるかさん……自分から足、開いちゃうんですか？ 全部丸見えになっちゃいますよ……？」

「つや、ちが、ツうあ♡ み……みちや、だめ、あッ♡ はじか、にやいで、うぐ……♡」

「クリトリス、好きなんですね？ ああほら、腰浮かせて自分からおまんこ近付けちやって……かわいいなあ、そんなにヘコヘコしなくて、沢山あげますから……♡」

カリ♡ カリッ♡ こすこすこす♡ ぬる……♡♡

蜂蜜よりももっと濃い甘さの声音と共に、ぬるついた中指がぴったり♡とクリトリスに添わされて、何度も往復される。

気持ちよすぎて、へこへこ……♡ と子犬のように浅く腰が振れてしまふのを止められずにいたら、ぐっ♡ と、もう片手と足で、腰をベッドに抑えつけられてしまった♡

「あッ!?!♡ な、なんでえ、ひいんっ!?!♡♡」

「わんちゃんみたいに腰振ってるの、すっごく可愛いんですけど……駄目ですよ、はるかさん。クリトリス、気持ちいいんですよね?」

「っ♡ うう……つき、きもち、いい、から……っこし、ゆれちゃ、んあおっ♡♡」

「駄目。触ってほしくてコリコリに勃起しちゃってるココ、たくさんいじめてあげてるんだから。逃さないで、全部おなかで受け止めてくださいね……?」

ぬちゅっ♡ぬりゅんっ♡

ちゅこちゅこちゅこちゅこっ♡♡

とろけて優しいのは口調だけで、押さえつける力もクリトリスを蹴る指も容赦がない。

おまんこから溢れた愛液をすくい取られ、いやらしい水音が聞こえるほど塗りつけられてたまらない感覚に襲われる。

(あ~~~~っ♡ むり♡ むりこれ♡ さっきまで焦れたいくらいゆっくりだったのに♡ 腰抑えつけられてから、すごいなされちゃってる♡ 引っ掻くみたいになっちゃうこちゅこちゅこ擦るのやだ♡ どこにも気持ちいいの逃せない♡ おなかの中ぐつぐつして♡ ああダメ、これ、いく、いっちゃう……っ♡♡)

「アツ、あ、あ……っ♡ ああやらっ、あさひな、さあん♡ だめ、いく、い……っく、いきゅッ、ああやだ、うあ、うあああおー……っっ!♡♡」

びくんッ!!♡♡

ぶるぶるぶる……っ♡ ぞくっ♡ ぞくん……っ♡♡
頭の回路が焼き切れそうだ。イク瞬間も腰をぐっ♡ 抑えられたせいで、気持ちいいのに吐き出しきれずに余韻が長引き、背筋の戦慄きが収まらない。

「ふ、っふふ……♡♡ 僕の名前呼んでイっちゃうはるかさん、ほんとに可愛いな……ああ、でもまだっつらそうですね」

「ふう♡ ふう……っ♡ は……っふあ、あっ!？ あっなに、まって、や……っ!？♡」

「気持ちいいの、まだ収まらないでしょう？」

ぴくぴくと足先を震わせ、快感を収めようと呼吸を繰り返していたのに。腰を引つ張られるように抱き直された。あまり焦点の合わない視界に朝比奈さんの姿が映る。わたしの足の間に入り込んで、太ももを、抱き込んでいる。

「あ……うそ、うそっ、……まって、今だめ、朝比奈さん……っ」

「はるかさん……そんな顔でダメって言われても、困っちゃいますよ。舐めてもらえるの期待して目潤ませた、えっちな顔……♡」

きゅう、と喉が鳴る。わたしは今そんなにも、はしたない顔をしているのだろうか。

恥ずかしさにふるふると首を振っていたら、悩ましげに眉を寄せた朝比奈さんの形の良い唇が、足の付け根にちゅううつ♡ と吸い付いてきた。

それだけでびくんッ♡ と身体が跳ねる。

「はッ……んん、っふう♡ ふッ、ふう……♡♡」

「ふふ、欲しがりで甘えたな息かわいい……クリイキしたての敏感な先っぽでまた、気持ちよくなりましようね……♡」

れろ……っ♡ れろ……っ♡ ちゅうううっ♡♡

熱い舌先がふるふる震えるクリトリスの先っぽに触れた途端、ぴいんっ！♡ と抱えられた足が突っ張った。

背筋が仰け反って、善がっているのが丸わかりの恥ずかしい体勢になっ
てしまっている。

（あー……っ♡ これだめ♡ あたまバカになっちゃうくらいきもちいい♡

イキたての敏感クリちゅうちゅう吸われる度、おまんこきゅうきゅう締め付けちゃう♡♡ こんなの恥ずかしすぎるのに♡ もっと強いのに、してほしく——……あれ？♡ やだあ、なんで、舐めるの、やめちゃうの……っ？♡）

「んむ……っはは、そんなに腰かくかくさせて押し付けちゃ駄目ですよ、はるかさん」

「んえ……っ？♡ うう、なんで……うあっ？？♡」

「強い刺激ばっかりだと、感覚なくなっちゃいますから。こつちでも気持ちいいの、覚えましょうね……？」

そう言いながら、クリトリスに舌は這わせたままだ。

朝比奈さんの細くて長い指が、潤んだ割れ目をゆるゆると辿って、そうして——ぬぷぷ……っ♡ と、おまんこに潜り込んで来てしまった♡

ずっと仕事一辺倒で、誰かの指を受け入れたことのなかったそこが、きゆうきゆう♡ と轟く。

「おっあ、あー……っ♡ や、っそれ、やぐらあ……っ！♡」

「やだ？ ごめんね、痛かったですか……？」

「ううっ……いたくない、けど……♡ は。はじめてだから、こわいい……っおうんっ！？♡」

ぬちゆう……っ♡♡♡ ぬぼっ♡ ぬぼ♡ れろろ……っ♡♡♡

はじめて、の言葉にぴくりと指が一度止まって、それから動きが変わった。優しくもねっとりとした手つきで入口をこそぐように動かされ、熱っぽい舌でクリトリスを舐め上げられる。

「初めてなんですわね、はは、嬉しいなあ……♡ 初めてだったなら尚更、優しくゆっくりしないと駄目ですよ。はるかさんが安心して力抜けるように、クリの裏筋も舌でちろちろって、舐めますね……♡」
「ふえ、な、なんで……あうろろっ♡♡ ああだめ、それ、あっあお♡♡」

膨らんで張っている裏筋をぬろろお……っ♡ と舐め上げられておまんこがきゆうんっ♡ と収縮する。合わせるように指を引き抜かれてはまたぬちゆう♡ と入れられて、次第に内壁の緊張が取れていった。

たまらなくなつて動かしにくい身体を少し持ち上げると、朝比奈さんの端正な顔はすっかり上気していて、ひと目で高揚しているのが分かるほどだった。

（な、なんでそんな、嬉しそうにしてるの……うあっ？♡ うう、指、二本入られちゃった……♡ クリゆるゆる舐めるのもやめてもらえないの♡ お腹側のところ、こそぐみたいに動かされて……ううっ♡ 奥のほう、うずうず、しちやう……♡♡）

「……覚えてきました？ ナカも気持ちよくなれてえらいですね、はるかさん……♡」

「あ……っ？ な、なにっこれ、ひううっ！？♡ ううつくりとナカ、りょうほう、やああっ♡♡」

「イヤイヤだーめ……中と外、挟まれて気持ちいいの覚えてください……？ ほら、逃げないで、気持ちいい、気持ちいい、おまんこ気持ちいい……♡」

ちゅぷちゅぷちゅぷっ♡ とん♡ とん♡ ぬろろ……っ♡♡

洗脳みたいな言葉と一緒に舌の腹でクリトリスを押しつぶされて、お腹側の変になるところをノックするみたいに擦られて、意識が遠くに行きそ

うだった。気持ちいいことしかわからない。

いったばかりなのに、波がまた押し寄せてくる。さっきよりもずっと大きい、波が。

「つひ、……つひい♡ も、これ……やあ、むり、またいつちやうう……♡」
「いいですよ、何回でもいつてください？ 僕が全部教えてあげます、はるかさん。クリイキも、おまんこイキも、連続絶頂も、ポルチオも。ゼーんぶ教えますから……僕の手でしか、イけないようになりましょうね……？」

ぬちゅ♡ ぬちゅぬちゅぬちゅ♡ ちゅううう……♡♡
何を言われているのか、もうよくわからない。

ただ指の動きがより規則的に、より追いつけるような動きになったことと、たつぷりの唾液と一緒に柔らかな唇でクリトリスを吸われたことだけが、頭の中に響いていた。

（どうしよ、逃げ場ないよお……♡ 吸いながらちろちろ先っぽ舐められて、ナカのざりざりしたところ、コンコンされて……♡ こんな、夢でもおぼえ

ちやう♡ 朝比奈さんの手でしか気持ちよくなれないって……覚えちやうのに、ああダメ、おっきいの、くるうづ……つつ♡♡)

「つひ、あ、あゝゝゝーっ!?♡ むり、むりこれっ、いく、いぐっ、いつちやづ、んぐううゝゝ……っ♡♡」

ぷしやつ!!♡ ぷしゅっ♡ びくん♡ びくびぐんつつ♡♡
ちよろちよろちよろ……♡

背筋が弓より引き絞られる。わたしは捕まえられている太ももから足先まで、ぴんっ♡♡ と力を込めたまま、頭が書き換えられてくような快感に浸っていた。

おまんこからちよろちよろと何か漏れてしまっていて恥ずかしいけれど、どうすることもできない。

もうなにもわからない。緊張しきった身体から力が抜け、ぴくぴくと痙攣するのが止まらない。

「は……すごい、お潮止まりませんね♡ 上手におまんこイキも潮吹きも

出来て偉い、お利口さんです……ああ、疲れちゃいましたよね。このまま寝ていいですから……」

甘ったるい声は、ずっと遠くから聞こえるみたいだった。

雲に揺蕩うようだった頭にもっと強く薄暗い霞が立ち込めていく。
瞼もどんどん重くなって、力が抜ける一方だ。

「はるちゃん……♡ 大丈夫、大丈夫だよ。僕がゼーんぶお世話してあげるから、ね……♡」

瞼が落ちると一緒に、ぷちん、と。

意識が完全にシャットダウンして、かけられている言葉の意味は、わからなかった。



——すごい夢を、見てしまった。

三日後。わたしはリモートワーク用の部屋で仕事をしながら、心ここにあらなかった。

（夢だったからかな……すごく遠い記憶みたいな感じなのに、感覚だけやら覚えてて……ううつ、恥ずかしい……！）

定期的に思い出しては、一人で青くなったり赤くなったりしてしまう。

今もまた、会社用のチャットツールに朝比奈さんの発言が表示されて「ひい」と一人情けない悲鳴を上げたところだ。

ちよつと冷静になろうとリビングに出たところで、宅配のチャイムが鳴った。

「！ はあい、今行きますー！」

急いで玄関の小窓に向かう。

さすが朝比奈不動産のモデルハウスと言うべきだろうか。

この家の玄関ドアの隣には小窓が設置されており、そこから宅配物を受け取ることができるようになっているのだ。

嬉々としてほかほかの宅配ご飯を受け取り、リビングに戻った。

（あ、そうだ。食前のサプリ、どうしようかな……）

朝比奈さんによると、どうやらこの間わたしはもらったサプリの分量を間違えて飲んでしまったようだった。

本当は一日三錠、食前に一錠ずつだったらしい。

海外のもので効きが良いことと、初めて飲んだことが重なり、バスルームであのまま倒れたそうだ。

リビングのソファで目覚めた時にはもう夜遅く、朝比奈さんの服もすっかり乾いていた。

「本当に申し訳ありませんでした、僕もしばらく飲んでいなかったもので、分量を忘れていて……。もう少し効き目のゆるやかなものもあるので、必要であればこちらを飲んでいただけると」

申し訳なさそうに眉尻を下げながら、違うパッケージのものを渡してくれた。

直前に見ていた夢を思い出して恥ずかしさが募りながら受け取ったはいものの、結局飲んではない。

ここに来てからは既に毎日、よく寝られるようになったからだ。静かなリモートワーク環境がわたしに合っていたらしい。

頭の中で繰り返されていた怒鳴り声も、少しずつ小さくなってきた。

「わあ、今日はオムライスだ……!」

箱を開けた途端、半熟のオムライスが見えて思わず声が出る。

ふわふわの卵の上には、艶のある濃厚そうなデミグラスソースがかかっている。サイドメニューもついていて、新鮮そうな具だくさんのサラダと、これまた具だくさんのスープだった。

これもまた、数日でわたしの体調が劇的に良くなった理由のひとつだ。

（はあ、おいしい……）。最近ずっと適当なご飯だったから栄養偏ってた

んだらうなあ。つくづく朝比奈さんに感謝しなきゃ……」

環境や食事でこんなにも変わるのには驚きだ。とはいえ数日と言っていたし、この生活も恐らく明日の終業時刻あたりまでだろう。

このまま多少でもリモートワークが導入されるといいのだが——そんなことを思いながら噛みしめるように食べたあと、数分もしないうちに朝比奈さんから電話がかかってきた。

「朝比奈さん！ お疲れ様です、どうしましたか？」

「はるかさん。お疲れ様です。すみませんが、ご相談があつて……今日のカウセリング、少し遅い時間でもかまいませんか」

「えっ、かまいませんけど、お忙しいなら明日でも大丈夫ですよ。わたし私物まとめておきますし」

「ああいえ、はるかさんにはもう少しそちらに居ていただきたいんです」
「えっ？」

「その件も兼ねてお会いしたときにお話しますね。21時すぎになると思います。遅い時間に申し訳ない、また夜に」

それだけ言って、ぷつりと切れてしまった。

朝比奈さんはこれまで毎日昼すぎに来てくれて、カウンセリングをしてくれていた。

といつてもほとんど生活のことやわたしの話を聞いてもらうだけになっていた。正直言つてリモート環境は申し分なく、初日から特に問題なく仕事をできているので、もう導入テストとしては十分なはずだ。

（うーん。21時からなんて残業も残業なのに、申し訳ないな……わたしは、朝比奈さんと話せるの楽しみだけど……）

静かに仕事をしている環境で、朝比奈さんと話す時間はささやかな楽しみになっていた。

けれど今回は手短に終わらせなければ。

そう決意を固めて、仕事に戻った。



“それでは配信者大会、優勝のルカにインタビュです!”
“いいーい、楽勝っした! あははっ、いや、すんませんめっちゃ嘘です、
本気で運良かっただけです! マジで全員強かった、ありがとうござい
ました……!”

20時すぎ。

終業時刻を迎え、宅配のご飯を食べ終えたわたしは、リビングでゲーム配
信をぼんやり見ながら、最近凝っている編み物をしていた。

これも朝比奈さんが用意してくれたものだ。カウンセリングの中でぼ
ろっと話したら、次の日良かったら、と渡してくれた。

いつも行く手芸屋では売っていない質の良すぎる毛糸で気が引けるが、
用意していただいたのに使わない訳にはいけないなあ、と思って簡単な
シヨールを編んでみている。

(そうだ、仕上げに水通しして……うーん。さすがに乾燥機にかけるわけに
はいかないな)

今までずっと衣類は乾燥機を使っていたけれど、手編みのものでは大変なことになってしまふ。

二階には広いベランダがあつたはずだ。

一度も出たことがなかったが、小さな物置が置いてあつたのは屋内からも確認できた。あの中に物干し台なんかは入っていないだろうか。

そう思つて一度中断し、階段を登った。

——けれど。

「……あれ？　開かない……」

金具が回らない。

当然、ベランダへの窓はレールに張り付いたように動かない。

ほかに鍵でもあるのかと思つてあちこち確認してみたけれど、どこにもそんなものはないし、回せそうな金具もない。

そこで気がついた。

——そういえばわたし、この数日間一度も窓に触っていなかった。

窓は大きいものばかりで、天窓もついていて日光は申し分なく入つてき

ていた。どの部屋も空調が効いていて換気扇とシーリングファンが回っていたから、開ける必要がなかった。

わたしが唯一開けていたのは――宅配用の、小窓だけだ。

（……う？　なんで……）

言い知れない不安が心に影を落とす。

わたしは急いであちこちの窓を開けようと家中を駆け回った。

どこも同じだった。開かない。回らない。もちろん玄関ドアも開かない。ガチャガチャと何度もドアノブを捻ったけれど無駄だった。

内側から開かないなんて、普通の家がそんな作りになっているはずはないのに、どうして。

そう思った時、カチャリと鍵の音が響いた。

「あつ、朝比奈さん……！」

「はるかさん？　こんな所で慌てた顔をしてどうしたんですか。ドア重いので危ないですよ、どうぞ、こちらに」

当然のように鍵を開いて現れた朝比奈さんが、ごく自然な動作でわたしの肩を抱き、玄関から廊下へと誘導する。乱暴ではないけれど、逆らえないくらい力の加減だった。

戸惑いのまま口を開く。

「朝比奈さん……っ待ってください、どうしてこの家、ドアや窓がひとつも開かないんですか!？」

「ああ、設定でそうなっているんです。開ける機能がないわけじゃないですよ」

「な、なんでそんな設定に……っ」

「……」

朝比奈さんは、一度口を閉じた。

わたしの肩を抱いた手をそのままに、高い背を屈ませ、顔を覗き込まれる。それは社員同士の距離の近さではなかった。

エスコートの域を超えた、息遣いを感じそうな距離感だ。

「はるかさん、体調不良だったでしょう？ この間もバスルームで倒れたじゃないですか。あんな状態で外に出るのは危ないです」

「あ、あれは薬が効きすぎたからで、もう毎日ぐっすり寝て元気です……！」

「自律神経の不調は数日で治るものではないですよ。あなたには、もうしばらくここにいて休んでいて欲しいんです」

「そんな……心配しすぎですっ、これじゃどこにも行けないし、誰にも会えない……！」

混乱のまま叫ぶように吐き出すと、突然朝比奈さんの肩がぴくりと強張ったように揺れた。

美しい双眸がゆっくりと細くなる。張り詰めたような冷たい空気を感じて、余計に戸惑いが強くなった。

「毎日僕と会っているじゃないですか。僕と会うのは楽しくない？」

「たっ、楽しいとか楽しくないとかじゃないです、仕事以外でも会いたいですよ……っ」

朝比奈さんの顔が更に近づく。

長い睫毛の先が触れてしまうのではないかというほどだ。廊下の光は朝比奈さんで遮られ、わたしの顔に影を落とした。

「——誰？」

いつも柔和な笑顔の抜け落ちた顔はどこまでも冷たく見える。

誰も何も、近くの実家の母親や父親、それに趣味の話をする友人のことだ。口を開こうとした瞬間、突如膝裏へ腕を差し入れられ、いとも簡単に抱き上げられてしまった。

「きゃっ！？」　ち、ちよつと、何ですか、やだ、おろして……っ」

「はるかさん、恋人はいませんかよね？」

「えっ？」

「僕ね、調べたんです。あなたのこと。それで今日、遅くなっちゃったんですけれど」

朝比奈さんの声はいつも通りひどく柔らかく、怒りも焦りもなく——むしろ甘いほどだった。

わたしを抱き上げたまま、まるで重さなど感じていないかのように、ゆつたりとした足取りで二階へ続く広い階段を登っていく。

「速水はるかさん。満25歳、156cm。ご実家はここから電車で1時間半の距離にある、少し坂の上の一軒家ですよ。ここから少し遠かったので今日遅くなってしまつて……ああ、ご両親はどちらも元気そうでしたよ。お二人ともまだお仕事をされてらっしゃいますよね。特にお母様とは仲が良く、こまめに連絡を取り合つています。先週の夜は15分ほど通話をして近況報告をしていたみたいですね」

冷水を浴びせられたかのように心臓が震えた。

どうして知つているのかと、そう聞くこともできない。視線が一切外れないからだ。

何も言えないまま寝室に連れ込まれる。

わたしの身体をシーツの上にそつと下ろす仕草はどこにも乱暴さがなく

丁寧で、だからこそぴくりとも動けなかった。
なおも言葉は続く。

「交友関係はあまり広くないですよね。SNSのフォロワー数は15人ほど。直近で連絡を取り合ったのは、学生時代からのご友人である『えな』さんだけ。彼女とはリプライで、ゲーム配信やアニメキャラクターの話ばかりしている。……ね、合っていますよね。他の男の影なんて、あなたの周りにはどこにもない。……そのはずです」

淡々と言っていた朝比奈さんの語気に、わずかに力が込められる。

一度言葉が切られて、耳元からぼふりと柔らかな音が聞こえた。
朝比奈さんがわたしに覆い被さり、頭の横に手をついた音だった。

「なのに——他に、誰かいるんですか？　僕がまだ知らない、誰かが」
「……そ、……っ」

はくはくと息が震えた。

逃げるようにシーツを蹴ってずり上がろうとしたら、追いかけるように肩を抱かれた。

強くはなく、むしろ包むような仕草で、けれどやつぱり逆らえない力加減だった。

思わず声を絞り出す。

「……そんなのっ、誰がいたって、いいじゃないですか……!」

瞬間、朝比奈さんの動きがぴたりと止まる。

部屋の空気も時間も、一瞬で凍りついたかのようだった。わたしはそれ以上何も言うことができず、けれど朝比奈さんも何も言わなかった。

水を打ったような静けさの中、何の光も宿っていない乾いた瞳が怯えたわたしを映している。

気の遠くなるような長い時間のあと、朝比奈さんはふー……と、細く長いため息を吐いた。

「何も分かっていないんですね、あなたは」

「は……？」

「誰がいたって良い訳がない。三日前は——あれほど僕に、可愛い声を聞かせてくれたじゃないですか」

「——え、……っ？」

——うそ。

あれも夢じゃなかったと、言うのだろうか。

思い出してカッと顔に熱がこもった。それを見た朝比奈さんがようやくふっと息を漏らし、恐ろしいほど柔らかかに笑う。

「ああ……覚えてないのかと思っていました。違うんですね。よかった。混乱させるかと思つて、黙つていたんですが」

「は、……？　うそ、……うそ、あんな、夢じゃ……っ」

「なるほど？　夢だと思つてたんですね。違いますよ。あの日僕はここであなを介抱して、あなたに触れたんです」

細い指がずるりと首筋に伝う。

そのまま顎の下へと添えられた。決して強くない力なのに、あつさりと指の甲で顎を持ち上げられる。まばたきをする暇も与えられないまま、ちゅ……っ♡ と唇が重なった。

「……つま、待って……ほんとに、はなしを、んっ」

「話？ いいですよ、このまま聞きます。あなたの交友関係の話ならたくさん……いえ、全部聞きたい」

「んうっ、そっそうじゃ、なくて……んむう……っ！？♡」

何度も重なる唇にうまく言葉が紡げなくなる。この間とは違うはつきりとした感触。

体温も息遣いも全て伝わってきて、あの日の書き換えられたような快感が頭を過ぎった。

「……じゃあ、あの日の話でもしましょうか。あなたが倒れたあと、僕が何をしたのか」

「へ……あ、あっ？ まって、やだ、取らないでくださ……」

「背中がびしょびしょだったんです。だからね、こんな風に脱がせました。寒かったんでしょね、あなたはとても無防備に可愛らしく、僕に擦り寄ってくれました」

思い出す。薄ぼんやりとした中で、自分が何も着ていなかったこと。

朝比奈さんと寄り添うようにベッドにいて、そして――。

そこまで考えた時、脱がされたシャツが手首に絡んで引つ張られた。両方とも頭の上でまとめあげられ、気がつけば身動きが取れなくなる。

袖口で結ばれ、拘束されてしまった。

「っあ!？ やっやだあ、とつてください、なんでこんなこと……っ」

「我慢できなくてキスしたら、気持ちよさそうな顔して、甘えたような声を出して……とつても可愛かったです。でも今のあなたも可愛いな。き、つて睨みつけちゃって……」

見下ろす色素の薄い瞳は、ひどく空虚で光がない。

長い睫毛の隙間にわたしだけしか映さないまま、長い指が次に向かった

のは内腿だった。

ゆるゆると撫でられるうちにはつきりと思い出す。あの日その指で、散々弱いところを嬲られたこと。

「——そういうの、煽るだけなので。僕以外にしちやダメですよ……？」
「そんな、待つ……っうあ、あ……っ！？♡」

スリ……♡ すりすり♡ くにくにくに……♡

間に割り込んだ身体で足を閉じることができないまま、スカートの中に入った指先がパンツのクロツチを柔らかく撫でる。それだけでビクツ♡と身体が揺れて、割れ目の奥が収縮する。

あれから幾度となく思い出していたせいだろうか。
こんなの恥ずかなくて、嫌で、怖いはずなのに。

「ああ、凄いな……ここ弱点ですもんね、はるかさん。撫でるとあつという間にピクピクしてきますね……」

「ひ……っ♡ ひうつ♡ やだあ、くり……っさわらないで、えあつ♡」

カリカリ♡ こしこし♡ こしこしこし……ぴん♡♡♡

布越しなのにこの間よりも感覚が鋭い。必死に身を振っていたのに先っぽを弾かれて濁った声が出た。ちっとも身体の制御が効かない。勝手に湧き上がってくる疼きの収め方がわからない。

「つく、……うう、っ♡ つひ、うづ……っん、く……っ♡」

「一生懸命声我慢してるの、えっちで可愛い……この間は、抑えようとしても漏れ出ちゃうみたいで……キスしながら、あんあん♡ って喘いでて、それもすごく可愛かったですけれど」

「……!♡ やっやだ、しゃべるの、や……うう……っ♡♡」

「ああ、耳も弱いんですか？ 弱点だらけですね、あなたの身体……やっばり外になんて、出しておけないな」

ちゅ♡ ちゅう……っ♡ かりかり……♡

ゆったりと甘い、吹き込むような囁き声と一緒に、布越しからでも分かるほど、むく……♡ と勃起してしまったクリトリスを柔く扱かれる。

逃げるように腰を引いては振るけれど、すっかり弱点を覚えたらしい指

が追いかけて離れてくれない。

そうしているうちに次第に割れ目から愛液があふれ、朝比奈さんの指に、ぬと……♡ とまとわりついてしまった。

「あは、はるかさんのおまんこ、素直でかわいいな……♡ わかります？ ほら、触って触ってえ♡ つて……ほら、ぬとぬと……♡」

「♡♡♡やらあ、っあ、お♡ だっだめ、ちよくせつ……っんうう♡♡」

染み出してしまった愛液をまとわせた指がパンツの中へと入ってきて、直接っ……♡ とおまんこの割れ目をなぞる。

それだけで縛られた手から力が抜けていく。怖さも驚きも、気持ちいい♡ で上書きされていくみたいだった。

(ゆび、遊ぶみたいになぞられてる……♡ うう、くちゅくちゅするのだめえ……♡ だめなの♡ うっとり見つめられたまま、親指でクリ捏ねられると……頭ばちばちして、抵抗できなくて……っ♡ あ、あ、あっ♡ やだ、やだ、クリ撫でながら指いれるの、やだああ……っ♡♡)

ぬちゅっ♡ ぬりゅっ♡ ぬふ♡ ぬふふふ……っ♡♡
確かめるように、焦らすように、数度なぞった指がおまんこの中に入ってきた♡

「ああ、やつぱりすごく狭い。こういうこと、この間が初めてだったんですよ、はるかさん……？」

「んうぐ……っ♡ うあ、……あえ？♡ っな、なんで、そんなこと……っ」

「言ってたじゃないですか、ご自分で。クリトリスはひとりで触っていたんでしよう？ こうやって、スリスリして……でもナカはまだコリコリで硬くて、指一本でも、キツキツでした」

つぽ♡ つぽっ♡ ぬちゅ♡ ぬりゅぬりゅぬりゅ……っ♡

思い出させるように、浅いところを数度、それからゆっくりと奥まで。囁き声と一緒に入ってくる指に、恥ずかしさと気持ちよさが同時に押し寄せて足先に力がこもった。

もう抵抗ができない。ぼんやりと快感に漬けられたようで、朝比奈さんから与えられる快感以外のことを、うまく考えられなくなっていく。

「んんっ♡ ふっ♡ ふづっ♡ ううっ、ふう~~~~♡♡♡」

「えっちな吐息……ふふ、思い出してきました？ あの日あなた、こうやって舌でクリトリス舐められながら、僕の指で、おまんこくちゅくちゅ♡ ってされて……」

「っや♡ やらあ、お♡ やめ、やめてえ……っ♡」

「盛大にお潮噴いて、イっちやったんですよ……♡」

「ひ……っんうう~~~~♡♡ みみ、みみやだ、あぁー……♡」

指を動かすのを止めて貰えないまま、朝比奈さんの舌が、れろ♡ れろれろお~~~~♡ と耳裏に這わされる。

時折軟骨の硬いところをちろちろ♡ と先端で撥るように撫でられるのがたまらなく恥ずかしい。

まるで、こないだクリトリスにした動きを再現されているみたいだ。

「ね？ あれ、すっかり癖にしちゃいましたよね。ナカの気持ちいいところ
覚えたら、たくさん出せるようになりますから……」

「ひうづっ♡ やっやらあ、そんな、ぜったいだめ、えあぁ……っ！？♡♡」

ぬぢゅう……♡ ずぬぬ♡ ぬぬ……っ♡

二本目の指が入ってきた。指腹がクリトリスの裏側を的確に捉え、可愛がるように何度もこしこし♡ 撫でられる。

欲しがるように奥がひくひくと轟くのを止められない。

「そうしたらきつと、サプリなんか飲まなくてもゆっくり眠れるようになりますよ。僕とここにいただけで、あなたの問題は何もかも解決する……」
「っひ♡ ひう♡ ううっもう、もお、ねむれて、りゅ……っあぁあゝ
っっ！？♡♡」

（やめて♡ やめて♡ クリこりこりしながら、奥の、し、しきゅう？ の
ところ、とちゅとちゅ指で叩くのやだあっ♡♡ 全然聞いてもらえなくて♡
強引にこんな、えっちなことされて♡ なんでこんな感じちやうの？♡

あ、だめ、ひくひくとまんない、くる♡　くる、きちやう……っ♡♡)

「そうでしょう？はるかさん。だから、ね……他の男なんか、いらぬですよね——？」

「あ、あ♡　あッ♡　ゝゝわ、わか、わかん、ないっ、しらにや……あだめ、きちやう♡　きちやうから、はなっ、……んぐゝゝ……っ♡♡」

ぷしっ！！♡　びくんっ♡♡　びくびくびく……っ♡♡

身体がびいんっ♡　と反りきつて、はしたないほど腰が浮いた。叩きつけられるような絶頂感と一緒に、炭酸の缶を開けた時みたいな勢いの水滴が溢れて朝比奈さんの腕にかかってしまう。

気持ちいいのが恥ずかしい。

もう本当に、やめてほしい。

それなのにナカの粘膜が、ちゅうちゅう♡　と指に吸い付いていくのを、自分でどうにかできなかった。

「は、うづ……っ♡　あさ、朝比奈さん……きいて、きいてください、はな

し……っ」

「ああ、おまんこイキ上手になりましたね♡ 本当にかわいい、……うん？ 何のお話ですか？」

ぬち♡ ぬち……♡ と余韻の痙攣を堪能するように指を動かされて足先が震える。

焚き火に火をくべるように、静まりかけた疼きがまたすぐに舞い込んできた。

またあの甘い責め苦が来る前に、説明をしないと。そう思つて口を開いた。

「っふ♡ ふうつ、い、いにやい……っ♡ 会いたいの、かぞくとか、ともだちとかでっ……かれしとか、いないですからあ、っ♡」

「……！ はるかさん……そうだったんですね」

こくり、と朝比奈さんの喉が鳴った。

改まったように顔が近付く。白い頬がうつすらと赤く染まり、先程よりもひどく悩ましげに眉を寄せている。

先程の怒りや冷淡さとはかけ離れていて、けれどどこか、末恐ろしい顔つきだった。

「じゃあ、それってつまり、あなたのこと、僕の好きにしている……ってこと、ですよね……？」